

古瓦より見た日鮮文化の交渉

木邦に於ける堤瓦の研究

美濃國古位牌の研究

陸前宮城郡の古碑

西大寺創立の研究

瀨河泉出土古瓦の研究

石田 茂作

木村 捷三郎

片野 温

松本 源吉

田中 重久

藤澤 一夫

各篇揃つて熱意ある勞作であり、新しいこの學問の分野に我々として研鑽の歩を進められつゝある各位に對して、先づ滿腔の謝意を捧げねばならない。佛教考古學研究の立場より見て、いづれの論致も種々示唆に富むものであるが、就中、藤澤、木村二氏の論文は、特に我々の注目すべき問題を呈示してゐるものといへよう。藤澤氏が、平瓦及び丸瓦の内外兩區のうち特に外區部の變移を注視することと、平丸兩瓦を一對のものとして資料單位とすること、この二つの一貫した主要な指導原理に立つて試みられた古瓦の編年の様式分類は、ひとり瀨河泉の出土瓦のみでなく、廣く我が古瓦の全體に應用すべきものであつて、創見に滿ちた研究として高く評價されるべきである。軒平瓦、軒丸瓦、或は鬼板、鴨尾等の如き裝飾文様のある古瓦のみを研究對象として、從前殆ど等閑視されてゐた堤瓦の究明に一步を進められた木村氏の勞も多

とすべきであり、それ自體としても古代屋瓦の研究上貴重な一篇であるが、なほまた、そこに於いて採られた文獻、遺物兩面より

の搖ぎない探究方法は、今後の佛教考古學、延いては歴史考古學の研究法に有力な暗示を與へるものといへよう。

兎も角、廣い範圍に互る學問であり、然もそれが未だ若々しい學問であるが故に、研究の第一歩から前人未踏の野に辛酸を嘗めねばならないのが佛教考古學の現状である。松本氏は百九十八の古碑を、片野氏は二百五十餘の位牌を一々實査する勞苦を敢て成し遂げて居られる。若し人にして、資料蒐集のみに離離として他を顧る餘餘少きことを唯一の理由に擧げて、這種論文に兎角の評を加へんとするものがあれば、それは全く見當違ひといはざるを得ない。佛教考古學の學としての體系は、かゝる人々の懸命の業績の上に立つてのみ、初めて結實するものであることを忘れてはならないのである。

寔に本書は、編者の言の如く、佛教考古學の如何にあるべきかを暗示する貴重な文獻として、執筆者各位の眞摯な努力に敬意を表しつゝ、熟讀玩味すべき玉篇であらう。(四六倍版、三〇八頁、昭和十六年五月、桑名文星堂發行、定價七圓)〔毛利久〕

彙報

史學研究會

例會 六月二十八日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に開催、稀に見る荒天であつたが、雷雨を冒して集る者數十名、左記の講演を聞いた。

滿鮮諸族の始祖神話に就いて

三品 彰 英氏

なほ本講演は別稿掲載された。

國史學會大會

五月二十四日(土)午後一時より樂友會館講演室に於いて平山、村山兩氏司會の下に開催。雨天にも拘らず多數の來會者あり、左記諸氏の講演を聴いて午後五時閉會した。

開會之辭

佛敎講式の成立とその基底
里内裏に就いて
洋學興起に關する一考察
祭墓に就いて
奈良朝の文物に就いての一二の考察

平山 敏治 郎氏
羽田 秀 典氏
鳥 道 雄氏
水野 恭一郎氏
平山 敏治 郎氏
梅原 末 治氏
藤 直 幹氏
村山 修 一氏

讀史會例會

六月十七日(火)午後六時より西部構内學生集會所階上に於いて開會。左の如き講演並研究發表があつて盛會であつた。

國史料春季見學旅行報告
臺灣 雜 觀
乙訓坐火雷神に就いて
中世末期に於ける一農村の政治的組織

二回生 梅 原 隆 章氏
二回生 石 澤 澈氏
大學院學生 村山 修 一氏
本學助教 中村 直 勝氏

東洋史談話會

例會 六月六日(火)午後六時より樂友會館に於て開催。宮崎、田村兩助教、森鹿三氏以下諸學士、學生多數參集、左の講演を聴く。

唐代國忌行香に就きて 教授 那 波 利 貞氏

國忌行香は北魏以來行はれたが、それは狭い限られた範圍に於てであつた。然るに唐に於てはそれが國家的儀禮として制度化せられ國民一般に及ぼされた。その時期は開元令ができてから以後のことである。右に關し、敦煌文書を始め幾多の史料によつて立證し、その政治的意義に言及した。

東方文化研究所公開講演

五月二十四日(土)午後一時より同所講堂に於て開催。

曆法 概 説 研究員 能 田 忠 亮氏
日本曆學大綱 囑託員 荒 木 俊 馬氏
囑託員 理學博士 平 山 清 次氏

曆法改革案について
六月七日(土)午後一時半より
西藏文化の研究とその意義 副研究員 長 尾 雅 人氏
支那に於ける租界問題 東京 東方文 植 田 捷 雄氏
化學院研究員

六月二十八日(土)午後一時
王者の記録としての甲骨文と銅器銘
研究員 平 岡 武 夫氏

〔關東州史前文化所見〕大長山島發掘物展觀

囑託員 梅原末治氏
文學博士

西洋史讀書會

例會 昭和十六年六月十四日、午後一時より於樂友會館講演室、本年度第二回例會を開催、原教授、井上講師を始め三高より數多の參會者を見非常な盛會であつた。講演會後別室にて茶話會を開催、原教授以下出席者三十名。

一、ランケの政治史觀とニイチエの悲劇史觀

土井虎賀壽氏

地理學談話會

例會 五月十六日(金)午後一時半より實習室にて開催、參會者二十名。

一、印度支那半島の米穀資源

西山和夫氏

名參會。

一、支那事變を繞る猶太問題

岡本信太郎氏

地理學教室春季旅行 六月二日から三日間。小牧教授、野間講師、三上助手、林副手の外、二回生は石田、今井兩氏、先輩は中田、西山、藤野、吉田の諸氏にて計十名。

目的地としては岡山縣兒島灣干拓地の興除村を選び、農業機械化を以て有名なこの村の實情視察に重點を置いた。機械化の本質

は要するに石油發動機を極度に利用するところにあつて、これは日本式トラクター、揚水ポンプ或は脱穀機等の動力として用ゐ、農業の機械化と合理的經營を企圖してゐる。現地視察に際しては、單に時局下當面の問題たる食糧増産の觀點からばかりでなく、寧ろ更に一步を進めて、農村への機械導入によつて起る日本農村の社會的變質といふ廣い觀點からも充分の考慮を拂つた。——農業勞働力の減退と食糧生産の擴充、經營面積の擴張と農村土地問題の解決、資材不足と助成金の交付、トラクターと降雨、農業機械化と日本内地の農村人口保有量の増減、更に滿洲或は泰國の如き農業國を含む東亞共榮圈に於て日本農業の占むべき意義と今後の進路等、參加一行は夫々かゝる重要問題と眞剣に取組んで、僅か三日間の調査ながら極めて有意義であつたと思ふ。

尙ほ四日正午すぎ倉敷驛にて解散後、有志數名は更に廣島方面を経て山口縣へ廻り、秋芳洞をも見學して歸洛した。

ゴルーベフ教授の來學

佛印と日本との學術交歡教授として來朝した河内極東學院會員ゴルーベフ (Victor Goloubew) 氏は六月十五日入洛、翌朝直ちに本學を來訪した。羽田總長を始め松本名譽教授、梅原教授等舊知と快談の後、同日午後三時より樂友會館に於いて「極東學院とその考古學的事業」なる講演を行った。先づ極東學院の事業、同博物館の内容を紹介した後、印度文明の影響を受けたカンボジアとラオス、並びに支那文明との交渉の多い安南、東京等この二つの

異つた文化圏に就いて述べ、この地の政治史的並びに文化史的推移を概観した。前者に於いては特にクメールのアンコール・ヅアットの遺跡が、後者にては漢代の甌窰、銅鼓の問題等が興味深く取り上げられた。かくて教授は更に十七日住友男爵邸を訪れ、その蒐集遺物を見學した後、同夜は再び日佛學館にてアンコール・ヅアットの遺跡に關する公開講演を行ひ、十八日には我が史學科陳列館をも梅原教授等の案内で見學する處があつた。因みに同博士は二十年來佛領印度支那にあつて、同地の考古學的遺跡遺物に關する調査報告を公にしてゐる考古學乃至佛敎史に造詣の深い學者である。(藤岡)

京都帝國大學文學部 史學科國史專攻學生 春季見學旅行報告

第一日(五月三十一日)

東照宮、那古野神社、名古屋城、徳川美術館、國立陶磁器試驗所、瀬戸試驗場、陶磁器陳列館、深川神社

朝八時京都驛集合、八時四十九分名古屋へ向ふ。一行は西田先生、藤先生、柴田先生以下先輩學生すべて三十名、午頃名古屋驛頭に降りたち、平山、田中兩先輩に迎へられ、市電で東照宮へ向ふ。

東照宮、那古野神社はもと名古屋城内三の丸にあり、明治初年舊藩學明倫堂跡に、隣接して移建されたものである。東照宮は元和五年徳川義直の創建、棟札によれば澤田若狭守藤原吉次の施工である。櫓門は側方にあり三間三面白木造で、拜殿の正面にないのは移建後の社地の都合によると思はれる。その創立年代が日光

の東照宮より古いことは注目すべきであらうが、建築美は著しく劣つてゐる。

那古野神社は由緒書によれば、醍醐天皇延喜十一年三月十六日勅により尾張國那古野庄に鎮座せられた天王社を起源とするといふ。

それより名古屋城に向ひ、時間の都合上外苑に入り金鯱を望遠鏡でながめ、天主閣のシンメトリカルな雄大な機構を見上げるにとどめた。

徳川美術館にて見學したものは、

「山伏物語畫卷」(三卷)詞は二條爲重、繪は筆者不詳、足利時代のものである。その他、舊藩公夫人の化粧用具類、陶磁器、刀劍、鏝、筭などの古器物であつた。

名古屋電鐵下ノ森驛より一路瀬戸市に向ふ。瀬戸に着けば、砂煙が甚しく、市の中央を流れる川は泥白色に濁つてゐる。これを見ても、この町全體が陶土に富んでゐることが知られる。街の兩側には家内工業的な陶磁器製造を行ふ家が軒を連ねてゐる。

國立陶磁器試驗所瀬戸試驗場は山腹部にあり、陳列場に案内され、參考品として瀬戸より發掘される土器、外國製の陶磁器を見學し、尙こゝで製作された陶磁器は多く輸出向のものであるが、その優秀なものには我々を驚嘆さすものも多くあつた。それより陶磁器製造過程を次々に見學し、又窯を見せ貰ふ。古式の登り窯は無かつたが、丸窯、角窯などを見、またトンネル窯なる最新のものを見せていただいた。トンネル窯によると一定の時間、一

定の火力をもつて焼け、その操作が間断なく行はれるといふ便利さがあるのである。この所を辭して陶磁器陳列館へゆく。これは他の地に於ける物産館が土地柄かくの如き形をとつたものと見てよいと思ふ。

深川神社はそれより二丁ばかりのところであり、もと八王子社と稱したところで、こゝの陶製狛犬は國寶である。狛犬は土藏に安置されており、少し暗いので判然と拜見出来なかつたが、鎌倉時代のすぐれた作品で、茶色をおびた淡緑色の釉薬は古色を含み、光澤も美はしい。

瀬戸記念橋驛より省營バスにて多治見市に向ふ。薄暮の瀬戸市を去り山路にかゝるところで、「古瀬戸」なる驛名あり瀬戸物の發祥地であらうと推定されるところである。バスは猛烈に満員で相當つかれてゐる我々にはつらいことであつた。多治見では喜久屋とびいどろやに分宿した。

びいどろやに泊つた人々は、瀬戸ならびに瀬戸物についての西田先生の文化講義を拜聴した。二回生は全部喜久屋にとまつた。

第二日(六月一日) 永保寺、禪興寺、新長谷寺、刀鍛冶場

朝、昨日のつかれもすつかり休めた我々は、興亞奉公日にふさはしく六時に起床した。

朝露ふんで徒歩にて虎溪山永保寺に向ふ。山路を越えて永保寺の庭園に入るとこゝの景色は實に絶佳であつて、支那廬山の虎溪にちなんで虎溪山と命名したところである。庭の池にかゝる橋の中央部が亭となつてをり瀧をながめるによい、開山堂は文和元年の

建立にて花狭間は堂内より外をながめたとき特に美麗なることを知る。觀音堂も美事で鎌倉時代の建築としてはすぐれたものである。屋根は上下層とも化粧極が一本もなく、軒の端の反轉が著るしい。此處へ天野先輩がたづねて來られた。それより案内を乞ひ古文書を拜見する。

一、卷子 一卷

「後醍醐天皇繪旨」正月十九日付、南禪寺住持職のことにつき上洛すべき旨。

「後醍醐天皇繪旨」南禪寺住持として上洛すべき旨。

「後醍醐天皇繪旨」七月二十日付、春宮大夫宛、元翁上人が南禪寺住持を御うけしことを關東に申し遣せる旨。

「辨官官旨」、本元を南禪寺へ住持せしむることについて後醍醐天皇の勅旨を傳ふ。

「光明院繪旨」尊融消息「足利義滿證狀」「足利義持證狀」「足利義教證狀」。

一、虎溪山文書、一帖、室町時代末期の文書をおさむ。

一、虎溪山文書、徳川時代の文書をおさむ。

一、慶長十五年虎溪山永保寺檢地狀、十八枚組、一帖。

一、「佛鑑」の二字一軸、佛德禪師筆

一、開山大和尚辭世偈、一軸

一、寛文十年巨景山永保寺對高土岐山兩村野論裁決狀、一枚、裏面に彩色の略圖を記す。

所屬の文書夥しく、右はその一斑である。爲に國寶の千手觀音

を拜観するいとまがなかつたのは残念であつた。夢治見驛よりガソリンカーにて廣見驛着。そこから十一時發御嵩行の電車にて願興寺へ向つた。

この邊では、願興寺は蟹薬師といふ方がよくわかる。寺傳によれば弘仁年間傳教大師の創建といふ。本堂は天正年間の再建であるが、ひどく荒廢してゐる。併し堂内には藤原時代、鎌倉時代の佛像が残つてをり、釋迦如來（この胎内銘に寛元二年甲辰五月廿三日造立之、佛師僧覺俊勸進聖人觀西、大檀那源康能、秦氏、小佛師定佛とあり）兩脇侍（文殊、普賢菩薩）四天王立像、阿彌陀如來、十二神將、日光菩薩、月光菩薩などが、完全にそろつて現存してゐるのは實に珍しい。外に同藩時代の判物類を拜見した。

願興寺を辭し、御嵩驛より廣見に出、美濃太田へゆく。驛の待合室にて晝食をとり、直ちにバスにて關町へ向つた。途中バスが故障したので二丁ばかり田舎道を汗にまみれて歩みなどしつゝ、新長谷寺までゆく。

新長谷寺はこの地方一流の名刹で、觀音信仰が盛であつた往時を偲ばしめるものがある。今も仲々股肱を極めてゐる。

本尊、本堂、三重塔、などの國寶とともにやはり國寶の阿彌陀像ならびに厨子は殊にすぐれたものである。厨子は春日作、四面開戸を有し、その扉の内側の二十五菩薩來迎圖は藤原末の優作で、よく保存されてゐて、見事なものである。本堂の須彌壇も一風變つたものである。本尊は拜観出來なかつた。それより客殿にて多

くの寺寶を拜見した。目についたものを點描すれば

- 一、織田信長折紙案
- 一、織田信孝折紙
- 一、羽柴筑前守折紙
- 一、徳川家康禁制
- 一、紺紙金泥大般若經斷簡
- 一、釋尊成道圖一幅、朝鮮より傳來といふ、嘉靖廿九年庚戌二月二十日とあり。

それより町役場の方に案内していただいて、日本刀鍛錬塾にゆき、刀劍鍛錬のプロセスを見せていたゞく。その嚴肅にして複雑なる操作により鍛へられゆくところに日本刀の特殊なる價值が考へられる。その構造に關して學者の理論と製作者の實際とのくひちがひなども説明されたが、これは如何なる部面にでも云はれしかもなほ解決されてゐないことである。日本文化の研究において斯かる經驗を重んじこれを理論化する態度が強く要求さるべきではないかと思はれる。

新關驛より電車で岐阜に向ひ、岐阜にて夕食をとり、七時すぎの列車で京へ歸途についた。

最後に今回の旅行に際して、色々の便宜と厚意を惜しまれなかつた方々に厚く御禮を申し上げたいと思ふ。（藤原隆章記）

會報

◇會員 勁 靜

◇入 會

京都市左京區田中東高原町五一 西川方
同 左京區鹿ヶ谷寺ノ前町二五

織田 隆氏
川上 達 雄氏
以上小牧實繁氏紹介

哈爾濱市馬家溝 國立大學哈爾濱學院北方亞細亞研究室

大阪市北區東町田町九ノ六〇

右外山軍治氏紹介
高 梨 光 司氏
右依々木利三氏紹介

京都市左京區北白川上終町九一 羽館方

中村 春 壽氏
右藤岡謙二郎氏紹介

京都市左京區淨土寺馬場本町三八

同 下京區油小路西條下ル 湯淺方

同 上京區東三本木丸太町上ル南町

同 伏見區納所町四七

同 上京區板倉町二 今小路方

同 左京區岡崎南御所町一 櫻澤方

京都市久世郡寺田村念佛寺内

野田好太郎氏
服部 玄 尚氏

京都市左京區北白川西町八〇 末川方

同 左京區吉田二本松町六 谷方

同 左京區吉田下大路町四五 眞田方

同 左京區田中大塚町一九 一ノ井方

同 左京區淨土寺馬場町一一 木村方

奈良縣郡山町南郡山

京都市左京區北白川洛東アバウト内

同 左京區田中下柳町三四ノ一

以上平山敬治郎氏紹介
加賀谷邦夫氏
梅溪 昇氏
八丁敏 臣氏
佐藤圭四郎氏
穂月敬 吾氏
鈴木直彌氏
北村 敏 直氏
坪 井 俊 孝氏

◇轉 居

臺北市佐久間町三ノ一三

福岡市南藥院露切一五

津市丸ノ内殿町 師範學校内

東京市麻布區斧町八八

同 豐島區要町三丁目八ノ二

◇寄贈 交換圖書 (八月現在)

中宮寺の諸問題 (夢殿選書)

講話 集 十三

木村重成關係資料の調査

會 報 一八・一九・二〇

東方學 報 東京第一二ノ一

蒙古學 報 二

同 會
東方文化學院
蒙古研究所

鶴 敵 郷 舎
皇典講究所
中央文化研究會

安 藤 正 次氏
重 松 俊 章氏
太 田 實 氏
大 口 喜 六氏
肥 後 和 男氏

軍事史研究 六ノ二・三・四
 中國文學 七・七三・七四・七五
 斯道文庫報 四
 蒙 古 八ノ六・七・八
 歷史と國文學 二四ノ六・二五ノ一
 無 關 之 五三・五四
 日本史學 七
 法經會論叢 九
 龍谷史壇 二七
 商業と經濟 二二ノ一
 宗學研究 二二・二三
 北方文化研究報告 五
 同願月刊 二ノ六
 史學雜誌 五二ノ六・七・八
 歷史地理 七七ノ六七八ノ一・二
 社會經濟史學 一一ノ二・三・四・五
 史 苑 一四ノ一
 人類學雜誌 五六ノ五・六・七
 考古學雜誌 三一ノ六・七・八
 文 化 八ノ六・七・八
 國學院雜誌 四七ノ五・六・七
 史迹と美術 一二ノ六・七・八
 經濟論叢 五三ノ二

軍事史學會
 中國文學研究會
 斯道文庫
 善隣協會
 太 洋 社
 むかしの會
 日本大學史學會
 北海道帝大法經會
 龍大史學研究室
 長崎高商研究館
 東本願寺宗學院
 北海道帝國大學
 北京佛敎同願會
 史 學 會
 日本歷史地理學會
 社會經濟史學會
 立敎大學史學會
 東京人類學會
 考 古 學 會
 東北帝大文化會
 國 學 院 大 會
 史迹・美術同攷會
 京都帝大經濟學會

社會學徒 一五ノ六・七八
 史 學 二〇ノ一
 臺大文學 六ノ三
 國民精神文化 七ノ五・六・七
 民族學研究 七ノ一
 東洋史研究 六ノ三
 哲學研究 二六ノ五六
 三田史學會
 臺北帝大文學會
 國民精神文化研究所
 日本民族學會
 東洋史研究會
 京都哲學會
 Harvard Journal of Asiatic Studies vol. 6, num. 2, 1941
 Harvard-Yenching Institute.